

第28回原子力委員会定例会議議事録

1. 日 時 2006年7月18日(火)10:30～

2. 場 所 中央合同庁舎4号館7階共用743会議室

3. 出席者 近藤委員長、齋藤委員長代理、木元委員、町委員、前田委員

文部科学省

黒村保安管理企画官、川崎安全審査官

日本原子力研究開発機構

柳澤理事、北端国際協カグループリーダー

内閣府 原子力政策担当室

黒木参事官

4. 議 題

(1)独立行政法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所原子炉設置
変更(VHTRC(高温ガス炉臨界実験装置)施設の変更)について(諮問)

(2)第5回敦賀国際エネルギーフォーラムの開催結果について

(3)町原子力委員会委員の海外出張について

(4)その他

5. 配付資料

資料1-1 独立行政法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所原
子炉設置変更(VHTRC(高温ガス炉臨界実験装置)施設の変更)について(諮
問)(案)

資料1-2 独立行政法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所原
子炉設置変更(VHTRC(高温ガス炉臨界実験装置)の変更)の概要について

- 資料2 第5回敦賀国際エネルギーフォーラム―「もんじゅ」の国際貢献とエネルギー教育―の
実施結果について
- 資料3 町原子力委員会委員の海外出張について
- 資料4 第27回原子力委員会定例会議議事録

6. 審議事項

(近藤委員長)おはようございます。

第28回の原子力委員会定例会議を始めさせていただきます。

本日の議題は、1つが、独立行政法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所原子炉設置変更の御諮問をいただくこと、2つ目が、第5回の敦賀国際エネルギーフォーラムの開催結果について御報告をいただくこと、3つ目が、町原子力委員の海外出張について御了承いただくこと、4つ目がその他でございます。よろしく願いいたします。

それでは、最初の議題。

(黒木参事官)最初の議題でございますが、独立行政法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所原子炉設置変更(諮問)について、文部科学省、黒村企画官より御説明をお願いいたします。

(黒村企画官)それでは、ただいま御紹介ございました独立行政法人日本原子力研究開発機構の原子力科学研究所原子炉設置変更(VHTRC)の変更について(諮問)でございます。

説明は、資料1-1号と1-2号によりまして御説明させていただきたいと思っております。

1-1号は、従来の諮問文でございます。まず変更の内容ということで、1-2号の方から御説明させていただきたいと思っております。

資料を開いていただきまして、申請者は日本原子力研究開発機構理事長の殿塚猷一、事業所名といたしましては、先ほど申し上げました東海研究開発センターの原子力開発研究所でございます。原子炉の型式及び熱出力、VHTRCでございますけれども、濃縮ウラン燃料黒鉛減速水平二分割型でございます。熱出力は10Wでございます。

申請は今年の6月9日でございます。変更の項目といたしましては、当該原子炉施設が現在解体中であること、今後燃料を使用することがないということで、使用済燃料の処分の方法について変更するものでございます。

変更の概要といたしましては、現在、「日本国から貸与を受けている燃料は日本国政府に返還する。当研究所所有の燃料は、VHTRCの核燃料物質の貯蔵施設に保管する。」、これを「使用済み

燃料は、VHTRC施設内に保管、又は日本国内の他施設に引き渡し、保管する。」という内容でございます。

別添2は、図1ということで、当該原子炉施設の敷地の配置図をつけさせていただいております。1-2については以上でございます。

それでは、資料1-1でございます。かがみ文につきましては、読み上げさせていただきたいと思っております。

原子力委員会委員長殿 文部科学大臣臨時代理 国務大臣 与謝野馨

独立行政法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所原子炉設置変更(VHTRC(高温ガス炉臨界実験装置)施設の変更)について(諮問)

核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律(以下「法」という。)第26条第1項の規定に基づき、独立行政法人日本原子力研究開発機構 理事長 殿塚猷一から平成18年6月9日付け18原機(科安)004をもって別添のとおり申請があり、審査の結果、別紙のとおり法第26条第4項において準用する法第24条第1項第1号、第2号及び第3号(経理的基礎に係る部分に限る。)に規定する基準に適合していると認められるので、法第26条第4項において準用する法第24条第2項の規定に基づき、当該基準の適用について、貴委員会の意見を求める。

以上でございます。

別紙でございますが、それぞれ平和利用、計画的遂行、経理的基礎の部分についての審査結果を記載させていただいております。まず、平和利用でございますが、本申請については、原子炉の使用の目的を変更するものではないということ、使用済燃料については、VHTRC施設内に保管、または日本国内の他施設に引き渡し、保管されることから、原子力は平和の目的以外に利用されるおそれがないものと認められると判断してございます。

計画的遂行については、本申請については、使用済燃料をVHTRC施設内に保管、又は日本国内の他施設に引渡し、保管するものであり、「試験研究炉の使用済燃料の取扱いについては、個別の状況を踏まえつつ、その取扱いの合理性を考慮しつつ検討すべきである。」とする我が国の原子力政策大綱の方針に沿ったものであることから、我が国の原子力の開発及び利用の計画的な遂行に支障を及ぼすおそれがないものと認められると判断してございます。

3点目、経理的基礎の部分でございますけれども、本申請に係る変更は、工事を伴わないため、資金を必要としない。このことから、原子炉を設置変更するために必要な経理的基礎については問題ないと認められると判断してございます。

御説明は以上でございます。

(近藤委員長)ありがとうございました。

本日は御諮問ということでございますので、質疑させていただき、私どもの意見は後日取りまとめさせていただくこととします。

何か御質問ございますか。

齋藤委員。

(齋藤委員長代理)変更前は、日本国から貸与を受けている燃料は日本国政府に返還するとございますね。この変更にも所有権の移転というのは含むのですか、含まないのですか。

(黒村企画官)この「日本国政府から貸与を受けている燃料」というものは既に原研の方で所有してございまして。

(齋藤委員長代理)所有権は既に移転されていると解釈して良い訳ですね。

(黒村企画官)移転されてございまして、今回はその所は必要無いということで削除したということでございます。

(近藤委員長)他に。

私からよろしいですか。「原子炉施設の解体に入り」という、この原子炉施設というのは具体的には何を指しているのですか。

(黒村企画官)VHTRC原子炉施設でございまして、現在、解体中ということになってございます。

(近藤委員長)ここにはVHTRC施設という言葉があるんだけど、これと同じものなんですか。

(黒村企画官)はい、そうでございます。

(近藤委員長)そうすると、施設は解体しつつあるところをその施設に保管し、あるいは他に引き渡して保管するというように変更するということですか。

(黒村企画官)はい。

(近藤委員長)いずれ無くなってしまうものを保管場所とするというのは、なかなか分かり難い提案と思いますけれども、とりあえずはそういうことにしたいということですね。

(黒村企画官)はい、とりあえずはそういうこととございます。まだ持って行き先等が計画が定まっていないということとございまして、こういう書き方にさせていただいております。

(近藤委員長)前田委員。

(前田委員)これは熱出力10Wというふうに記してあるんですけども、使用済燃料の量というのはどのくらいあるんですか。

(黒村企画官)これは高温ガス炉用の試験でございまして、燃料コンパクトと言って、大体4センチの円で高さが4センチぐらいの円柱状で中に穴があいているものと、あとは燃料の円盤状のディスク

のものがございます。これも直径は4.5センチ程度で、これは高さが1センチぐらいのものでございますけれども、まずはコンパクトの方が、濃縮度別に申し上げますと、2%で3,090個、4%で6,180個、6%で3,090個でございます。ディスク状のものについては、2万5,575個というような数字が現在保管されているような状況でございます。

(前田委員)随分沢山あるんですね。分かりました。ありがとうございました。

(近藤委員長)よろしゅうございますか。

それでは、先ほど申し上げましたように、私どもの意見は後刻取りまとめさせていただくことにします。ありがとうございました。

それでは、次の議題。

(黒木参事官)2番目の敦賀国際エネルギーフォーラム開催結果についてでございますが、日本原子力研究開発機構、柳澤理事、北端グループリーダーより説明をお願いします。

(柳澤理事)おはようございます。よろしく申し上げます。

それでは、資料に基づきまして、敦賀国際エネルギーフォーラムの御報告を申し上げます。

今回、第5回ということで、これは「もんじゅ」の事故が起こってから3年半ぐらいて一段落したところで、「もんじゅ」を立ち上げるために国際的なメッセージを発していこうということで始めまして、大体1年半から2年に1回ということで、10年たちましたけれども、3年ちょっとからすると早いピッチで5回を迎えることになっています。

開催の目的にありますように、今回は海外の色々な動きとか原子力の国内の動きもあります。そういう意味で、海外のエネルギー政策、原子力の展望の紹介をいただいて、その上で「もんじゅ」の国際的な重要性とか、そういう認識とともに、今、福井県ではエネルギー研究開発拠点化構想ということで、人材育成、特に小学校、中学校、高校生の教育ということが議論になっていますので、副題にありますように、「もんじゅ」の国際貢献とエネルギー教育ということでやらせていただきました。

日時は、6月28日から30日で、30日は見学会ということで、福井県の若狭湾のエネルギー研究センターということで、近藤委員長にもお越しいただいてありがとうございました。参加者は延べ1,000人ということでございまして、大体初日が500人ちょっと、2日目が430人、それから50人が見学ということですので。見学は「もんじゅ」、「ふげん」、それから若狭湾エネルギー研究センター、もう一つは関西電力さんのシステム研のところを見学に行っています。

概要でございますけれども、冒頭には飯島副知事、それから河瀬市長、文部科学省からは藤木審議官、エネ庁からは小平長官がお見えいただいて、色々お話をいただきました。

今回の特徴は、初めて福井県、敦賀市、美浜町がバックアップという意味で後援に参加していた

だいたということで、近年、エネルギー研究開発拠点化の取組で連携が非常に密になっているということで、我々からすると、やっと自治体の方々も参画していただけるようになったということで、正直、時代が変わったなという気もいたしております。

それから、次のページでございますけれども、基調講演としては、近藤委員長からいただきましたし、それから特別講演は福井大学の児嶋学長から「科学技術と教育」と、それから特別講演、もう一つ今アメリカの動きが色々動いていますので、スパージョンDOE次官補から「米国の原子力政策」ということで、GNEPあるいは我が国との協力という話、後でちょっとつけ足しさせていただきます。

それから、セッションⅠというのが「各国のエネルギー政策と原子力の役割」ということで、これはずっと神田先生が第1回からのこの枠を取り仕切られているというか、やっていただいております。今回は中国、インドからお見えいただいたということで、インドからなかなか難しかったんですけども、お見えいただいて、「もんじゅ」の中は御覧いただくことができていないんですけども、いろいろな意見交換もすることができたのが大きな特徴じゃないかなと思います。

それから、セッションⅡでは、国際的な原子力拠点としての「もんじゅ」の役割ということで、機構から「もんじゅ」の現状、あと米国、フランス、ロシアから高速炉・次世代炉の展開の話、それから竹田先生からは、原子力学会で「もんじゅ」の利用委員会ということで、学会としての色々検討もいただいております、その御報告。さらに、ブシャールさんは、今、敦賀の国際協力特別顧問ということをお願いしていますので、「もんじゅにおけるMAの燃焼計画」というようなことをお話しいただきました。

この中で、インドからの発言もありまして、インドとしては、今は国際協力が非常に難しいことは認識しているということです。いつかは「もんじゅ」と一緒に協力できるといいなというようなこともコメントしていただいております、無理に何かやりたいというようなことではないということを御自分でもその辺はお話になっていました。

あと、議論の中では最後にありますように、これから燃料開発であるとホットラボ等の研究開発の整備というようなことも関心がありました。

セッションⅢでは、「エネルギー教育と地域の取組み」ということで、全体を福井大学の伊佐先生に仕切っていただきました。特に、フランス電力公社、EDFがフランスではエネルギー教育で相当学校に行き話をしてというお話がありました。

3行目、ちょっと誤字がありまして恐縮ですが、「エネルギー実践校」と書いてあるんですが、少なくともこれは「エネルギー実践校」、正確にはエネルギー教育実践校でございます、小学校の先生がお二人お見えになって、現場でのお話をいただいた。それから、橋詰先生、福井新聞の元論説

委員長ですけれども、今は大学でコミュニケーションあるいはメディアの話をされております。そういう中で、アンケートをとって議論していただいております、教育問題をこういう場で取り上げたのが初めてということで、多くの教育関係者の方から意義があるというようなことをおっしゃっていただいております。一部の先生は、国際協力の話等の中で、異次元の世界に飛び込んだというようなことをおっしゃっていましたが、帰るときには来て良かったというようなことを先生からもおっしゃっていただいているので、そういう意味のスタートになったのかなと思います。

それから、フォーラムの前に原子力熱中塾というのをやっています。これは20人ぐらいの教室スタイルで、6クラスに分かれて、ここでは木村先生や阪大の竹田先生、あるいは住田先生も参加されて、あるいは機構の技術者や女性の「あっぷる」というメンバーもいますけれども、こういう人達がそれぞれ教室で色々な話をさせていただいたということもあり、大分好評でございまして、続けることができます。

それから、7番目にありますように、会場内ではエネルギー教育ということで色々なポスターセッションを各団体とかセンターから出していただいて、あるいは電力さんからも出していただいたというようなことで、これも結構、教育界の方々には好評であったというふうに思っております。

それから、3ページでございましてけれども、今回のフォーラムの開催に当たっては、従来にも増して関係機関、特に教育委員会がバックアップに回っていただいたというようなことが大きな特徴だろうというふうに思います。あとはこれまでどおりです。

あと、ホームページでは全部をビデオで御覧になるように翌日にはなっています。そういう意味では、遠くからでも現場の様子が全部、講演が聞けるようになっています。ただ、通訳さんのは色々なことがあって英語のままですけれども、少なくとも雰囲気あるいは聞いていただければよく分かると思います。あと、地元プレスも2日間に渡ってこういうものを報道するというのは、極めて地元としては希なんですけれども、2日目が教育問題ということもあったので、多分そういうことを報じていただいたのではないかなというふうに思っています。

そういう意味では、我々原子力機構としても、教育問題というのは初めて手がけましたけれども、各地域の取り組みに広げていくか、展開していく一つの基礎になったじゃないかなということを思っています。

次回は、第6回は2年後ぐらいということで、「もんじゅ」も運転再開の頃ということになると思います。その頃に企画したいなというふうに思っております。

次のページを、時間もあれなんですけど、主な参加者ということで先ほど延べ1,000人と言ったんですが、一般参加者のうち地元高校生、短大・大学生、校長先生等で、教育関係が大体延べ270

人ぐらいということで、随分お見えいただくことができて、地元高校生はこれを講義にしていた高校も随分ございました。

それから、次のページはこれまでの2日の講演の概要なんで後で御覧いただければと思うんですが、近藤委員長のをここで御紹介するのもあれですが、一番最後になりますが、これらの諸活動に関して志を同じくする国々ということで、特にジェネレーションIVが先週ぐらいに中国、ロシアも正式に参加ということが合意されましたので、その辺も踏まえてのことでおっしゃられているんじゃないかなと思いますけれども、ともかくいろいろな国がある中で、やはり価値観が国際的に育っていくということを強調されていました。

特別講演1では、児嶋先生がおっしゃっていたのは、一番最後にありますように科学技術の創造立国で最先端の人材の育成ということを強調されていました。

それから、添付2-2でスパージョン次官補が「米国の原子力政策」ということで、上から3つ目にありますように、原子力2010プログラムで新設の話、さらには、使用済燃料でユッカ・マウンテンから燃料の再利用、それから液体金属の燃料でリサイクル技術というようなことで国際協力ということで、最後にありますように、GNEPの概念として高速炉があるので、ジェネレーションIVで協力を続けていくということをおっしゃっています。

あと添付2-3では、フランスは、一番下にありますようにガス炉の話が皆さんから色々関心があったので、開発段階の差をナトリウム炉とガス炉のそういうのを認識した取組をするという話がありました。

中国からは、非常に積極的な話がありまして、結局は増殖性を重視して金属燃料というようなことがありましたけれども、金属燃料の再処理等が抱える問題も大変だということは認識されていました。

それから2-4がインドでございますけれども、インドはご存じのように独自の路線ということで、海外からの協力がそう簡単に得られないということで、まずは天然ウランでプルトニウムを作って、そのプルトニウムで高速炉、その後、その高速炉からトリウムをウラン233ということで、その中で重水炉も取り込んでいくというような話がありました。

あと2-5ページで、「国際原子力拠点としての「もんじゅ」の役割」中でスパージョンさんが言われたのは、フェニックス、さらに「常陽」、「もんじゅ」での燃料照射ということで、特に燃料とか燃料サイクルの開発で国際協力をしたいということをおっしゃられています。

それから、カルボニエさんがフランスの原子力としては、ナトリウム炉では特に投資コストの抑制ということで、経済性について「もんじゅ」との関係というようなことをおっしゃっています。

それから2-6で、ロシアはBN-1800で180万KWを将来やるんで、「もんじゅ」に対しては燃料材料、解析コード、人材育成というようなことの協力を提案しています。

最後、ブシャールさんが、トータルとして言われているのは、まず高速炉が安全に使えることと、それから炉性能に及ぼす影響の国際評価、それらが知識保存につながる。さらには、照射であるとか水素製造というような意義があるということをおっしゃっています。

教育問題については、福井大学の伊佐先生が、一番上にあるように、エネルギー教育は多少行われているとしても、エネルギー問題教育については行われていないということで、エネルギーが抱えている問題だとか課題を共有するとか、共感するとか、そういうことが欠けていますねという話です。

EDFからは、EDF自身が小学校、中学校、高等学校の教育科目に取り込まれているということで、是非フランスの教育現場を御覧下さいというようなことがありました。

後は、橋詰さんからは、大学でアンケートをとって、発電所を見学した経験がない人がほとんど、これはある意味でもっともだと思います。15基あることを知っている人と知らない人では、知らない人の方が58%で多いなということで、下から2つ目にあるように、やはり原子力教育についても現場を知ることが大事だということと、橋詰さんの持論ですが、エネルギー環境教育というだけでは原子力は駄目だと。むしろ原子力についてもうちよっと踏み込んだ教育ということを考えていきたいという話がありました。

それから、2-8ページで塚本先生と田中先生、これは小学校の先生がお話になって、やはり現場では省エネルギーということでエネルギーの消費というのは、ある意味で不可逆な方向ですから、非常に大切に使うものであるというようなことを今教育していますというのがございました。

ちょっと雑駁でございますけれども、御紹介ということでは以上でございます。

最後に、アンケートを200件ぐらい取りまして、その中で色々な意見がありました。特に今回、基調講演、特別講演が非常に新鮮であったとか、あるいは説得力があったというような感想がどうございまして、あとは今後のことについては、やはり熱中塾等々でもう少し話がしたかったというようなことの御意見もあったので、ちょっとその辺も工夫していきたいなというふうに思います。

以上です。

(近藤委員長)ありがとうございました。

それでは、せっかくの機会ですから、御質問、御意見がございましたらどうぞ。

木元委員。

(木元委員)ありがとうございました。

幾つかあるんですけども、今回は、美浜町、それから教育委員会も含んで27機関の後援ということで、これは大変な成果だと思っています。アンケートをお取りになった中に、美浜町の方とか教育委員会の方のアンケートはあったのかどうなのか、それは特定できないかもしれませんが、アンケートのことがちょっと気になりました。

それから、もう一つは講演のビデオ映像をホームページで公開されていますけれども、私の経験から申し上げますと、著作権に対して大変シビアな時代になりましたので、そのところはきちんとフォローなさっていらっしゃると思いますけれども、通訳の部分に関しては、ホームページ公開の使用許可は取れなかったと。

(柳澤理事) ええ、それはやっぱり。

(木元委員) 著作物としての権利を主張なさっていますか。

(柳澤理事) ええ、権利を、そうです。

(木元委員) そうですね。

(柳澤理事) あとは全部御了解いただいて。

(木元委員) 使用しても大丈夫だということですね。

それから、地元のプレスですけども、プレスが大分フォローしてくださったということですが、プレスというのは新聞社だけではなくて、テレビの番組での紹介とかニュースとか、そういうものはどうでしたか、具体的には。

(北端グループリーダー) テレビが地元が2社とNHKが1社、それからNHKの国際放送が1社来ていただいています。

(木元委員) どのぐらいの分数でしょうか、ニュースのボリュームですけども。

(北端グループリーダー) 5分ぐらいありました。

(木元委員) 1社についてですか。

(北端グループリーダー) 1社でした。

(木元委員) それはかなり長いですね。

(北端グループリーダー) 長いですね。国際放送は、インドのグローバーさんに対してのインタビューを入れまして7分程度でございました。

(木元委員) それは独自のインタビューですか。

(北端グループリーダー) そうです。

(木元委員) そうですね。それはかなりボリュームとしては長いんですけども、結果はどうですか。その視点といいますか、メディアのレポートの内容は。

(北端グループリーダー)決して批判的ではありません。各国とも新しいエネルギー開発に取り組んでいこうとしていると、原子力開発に取り組んでいるということだと思います。

(木元委員)そうですか。ありがとうございました。

確認ですけれども、講演その他のビデオというのはノーカットですか。つまりノー編集ということですか。

(北端グループリーダー)編集はされています。例えば、グローバーさんのインタビューとかというのは。

(木元委員)先方のビデオインタビューでの編集は良いのですけれども、ホームページで公開されているのはカットはしていないですか。

(北端グループリーダー)カットしていません。そのままです。

(木元委員)そのままですね。ありがとうございました。

(近藤委員長)前田委員。

(前田委員)感想になりますけれども、私も前に、たしか第2回目だったと思うんですけれども、1つのセッションの座長をしたと思うんですけれども、その時と比べると、今のお話を伺うと随分変わったなという感じがするんですよ。これは、おたくが努力してこられた、継続は力なりというか、そういうことがあると思うんですけれども、特に感じたのは、地元自治体が今回初めて後援をしてくれたと。ちょっと遅過ぎるんじゃないかという気もするけれども、しかしこれは入ってもらったのは非常に大きな意味があると思います。

それと、教育関係、合計270人という話があったんですけれども、これも非常に年々増えてきて、非常に有意義だと思うんですが、これは主として高校生ですか、中学、

(北端グループリーダー)中学はいません。高校が8割方です。あと短大生と大学生が約20人ぐらいです。

(柳澤理事)橋詰先生が仁愛大学とか行かれたところの学生さんを、これを聞いていけとか言われて大分。

(前田委員)そうですか。地元敦賀の年中行事というか、定例的な行事としてもだんだん定着してきているんだろうと思いますけれども、是非これは今後ともしっかりと続けていっていただきたいと思います。感想です。

(近藤委員長)町委員。

(町委員)私も教育問題に焦点を絞ったのは非常に良いと思います。一つ聞きたいのは、今後エネルギー教育をどう進めていくべきかという議論をした結論をどういうふうアクションにつなげていくか

という議論があったのかなということです。

また、原子力熱中塾というのはおもしろいと思います。ただ、このセッションで議論が双方向になっているのか、活発な議論があったのかを知りたい。そうであれば、これは教育に大いに役立つと思います。

違う話なんですけれども、インドの参加者が「日本とインドの原子力発電の協力は難しいことは認識しているけれども」と話したとのことですが、なぜ難しいと考えているのか、説明があったのなら教えていただけますか。

(柳澤理事)教育問題で今後の話ということで、バックアップとしての教育委員会はいろいろ後援いただきましたけれども、基本的には教育委員会は、あまり今、相当タッチするというのではないような現状です。むしろ現場の先生と、我々とか電力さんが、そういう先生とコミュニケーションをして、教材だとか、今はさっき伊佐先生からあったように、問題点を分かり易く説明するにはどうするかというようなところが今の現状でございますので、そういう中で、エネルギーが抱えている問題点とか、課題をどういうふうに考えてもらうかということが次の皆さんの認識の取り組みかなというふうに分えられると思います。

(町委員)高校の先生そのものが自分でもっと勉強して、分かり易く教える方法を工夫する必要があると思います。

(柳澤理事)あと学校によってやはり校長先生とか、エネルギー実践校に色々指定されると、支援とか何か受けやすいなということは大分認識されているので、そうなると、やはり新しい取り組みを提案しないと、そういう指定校にはならないんで、現場も校長先生を初めそういうことで苦勞されるので、我々はそういうところに行って一緒に提案の手助け、ちょっと言葉は悪いんですけども、そういうことはやらせていただいています。

それから、熱中塾は、双方向そのものです、これは。そういう意味でスミタ先生なんか昔からご存じなんで、私にも是非やらせて欲しいということで盛り上がってやったんですけども、大変地元でも楽しみにしていたり、好評ですし、高校生の教育の一コマにもなっているようでございます。

それから、インドがやはり難しいと、我々も例えば「もんじゅ」を見られないということで、相当気にするかなと思ったけれども、インドの方自身は、そういう中で色々難しい。それをどうこうしようということは御自分では今語られてはいないです。だから、早くそういう道とかが開けることをということで、自ら穴をあけるという話では今回は無かったと思います。

(近藤委員長)齋藤委員。

(齋藤委員長代理)なかなか盛会で、色々おもしろいお話を聞かせていただきました。

2点ほど質問があるんですが、1点は一般参加者でいわゆる本当の市民、そういう人は、最後の表の一般参加者から学校関係者を差し引いた人数と数えれば良いのか、それからその中で敦賀で実施された訳ですが、福井県は嶺南と嶺北で相当原子力に対する考え方が違うというようなところもあると聞いていますが、嶺北の人はどのくらい関心を持って参加をされたのでしょうか。

もう一つは、第5回と言うことで、回を重ねられて、これを始めた発端の意味合いから少し変わってきたところもあり、今回、教育問題を入れたのも結果として良かったというお話でありました。タイトルが敦賀国際エネルギーフォーラムであり、それに共催の中には各電力会社さんも入っているということになると、将来的には軽水炉とかプルサーマルとかも含めて一緒になってやるというようなことも考えられるのか、その辺はどうお考えですか。

(柳澤理事)先ほどの参加者の中でどういう人が多いかということ、正確に内訳までなかなか分からないんですけども、どういう方がいるかということ、やはり全国からの原子力安全研究者の方がいらっしゃる。それから、当然電力の方。それから、我々モニターといって県内の方を。そういう方たちと、あとサイクルミーティングで全県回っています。そういう中でお付き合いしている方。

それから、さっきの研究開発拠点化で、例えば鉄鋼組合だとか企業でお付き合いしているところが随分あります。そういうところに参加されている方はやはりお見えになるということで、そういう方は嶺北の方も結構いらっしゃるって、やはり技術的にそういう関心がある方たちは嶺北関係多いんですけども、嶺南の方はやはり地元にある「もんじゅ」、今回は「もんじゅ」というようなことでお見えになる方がいるので、相当多種多様な方がお集まりになっています。

それから、将来これをとということですが、今、我々はやはり「もんじゅ」、極端に言うと「もんじゅ」なくして高速炉開発なしというぐらい「もんじゅ」をきちんとやらなければいけないということなんで、やはりここを国際的にも使っていただくということがこの敦賀国際エネルギーフォーラムの基調というか、主軸にしたいと思っています。

そういう中で、プルトニウムをどう使うかというような課題については、当然プルサーマルとか、今の軽水炉との接点をどうするかというのは、副次的な問題として扱うということはあると思いますけれども、軸としてはやはり「もんじゅ」、FBRというのを当面は、少なくとも「もんじゅ」がしっかりいくまでは置いておきたいなと思っています。

(木元委員)ちょっと追加でよろしいですか。

今の教育関係ですが、エネルギー教育というのはかなり前からいろいろ言われていて、それに関心をお持ちになったり、危機感を感じていらっしゃる方はそれなりの発言を繰り返しているんですけども、私は原子力部会の方で発表させていただいたんですが、教育現場で使われている教科書、

たまたまこれも高校生の公民の教科書ですが、東京書籍という全体の25%以上を占めている出版社の教科書です。その中で原子力に関する記述というのが、大変に偏り過ぎているというか、ある一つの恣意的な方向を暗に示しているのです。ですから、教育者が幾ら熱心に講義をやったにしても、学校で取り扱っている高校の教科書が問題だというような御提示はなかったのでしょうか。

(柳澤理事) 今回も教科書の問題はなかったですが、日ごろ地元でやっているときには、木元委員ご存じのように、茨城県の場合には、小学校、中学校、高校と原子力として出だしがもうジェーシーオ一の事故から入っているとか、そういう教科書は福井県については非常に皆さん衝撃的でした。こんなのが受け入れられるのかと。

だけでも冷静に考えて、なるほどこれぐらいじゃないと原子力は冷静に考えられないなということは、我々お持ちしています、いろいろな現場で。そういうことで少しずつ今話が変わってきて。

(木元委員) 今回のこのフォーラムではないですね。

(柳澤理事) ないです。

(木元委員) 茨城県の場合は、教科書の副読本なんですね。県の予算で独自に作っていらっしゃる。

それはちゃんと小中高と分けてやっているんですけども、今回のこういうフォーラムで教育を論じたとき、教科書まで言及なさった方がいらっしゃるかということをお聞きしたのですが、それはなかったんですね。

(柳澤理事) なかったです。

(木元委員) それは私としてはちょっと残念です。橋詰さんもせっかくここまでおっしゃっているから、そこをフォローされたかなと思ったんですけども。

(近藤委員長) ありがとうございます。

私は、講演をさせていただいたところ、それにまずはお礼を申し上げます。ただ、ここに私の発言の英語バージョンがついていますが、これを作る際に一言言ってくれても良かったんじゃないかと思えます。

(北端グループリーダー) 表には、事務局の方で訳させていただきましたとお断りしておりますけれども。

(近藤委員長) 私の日本語は分かりにくいという評判なので英語にはしにくいだろうと思うところ、私自身が手を入れてさし上げたかったということです。

それから各委員からの御指摘は今後に向けてのアドバイスというか、検討事項ということでおっしゃられたのかと思うんですけども、御意見を伺っていて、この会のプログラミングのあり方に工夫あるべしということをおっしゃりたかったのかなと思いました。この会合がこれだけ成長してきますと、

やはりプログラムについてプログラム委員会というか、そういうクレジットを明らかに出来るものの存在も重要なのかなというふうに思いました。ここにある運営委員会というのはいわば役職指定の方が多いわけですが、例えば教育という問題を扱うとすれば、それなりのプロの方がプログラミングすると。プロという意味はすれた人という意味じゃなくて、対象が児童生徒であるとしめすと、それなりの教育的配慮ということが必要になるという面もあるわけで、そういう意味のプロフェッショナルがコミットしているということもまたそれなりに重要なことだと思うからです。御名前から判断してここにそういう方が既にいらっしゃるということかもしれませんが、テーマごとのプログラムコミッティ、ワーキンググループを明らかにするとか、そういう工夫が今後あってもいいのかなというふうな感想を持ちました。

地域社会で非常に評価され、定着し始めているということですので、そういう意味のクレジットビリティを高めていくということの努力もされた方がよろしいのかなという感想を持ちました。

もう一つだけ余計なことを言うと、ロビーで禁煙が徹底していないのはたまらないですね、公開のああいう場でこの頃はないでしょう。

(柳澤理事)一応分煙にはなっているんです。

(木元委員)でも、今の時代、おくれていますよね。禁煙にしていなかったんですか。

(柳澤理事)いや、分煙室はあるんです、喫煙室は。

(近藤委員長)建物の設計がよくないのかもしれませんがね。まあ余計なことを言いました。でも2日間、あそこにずっといろと言われたら辛い人もいるんじゃないかと思いました。

ありがとうございました。

それでは、報告をご了承いただいたということで本件終わらせていただきます。ありがとうございました。

では、次の議題。

(黒木参事官)3番目の議題は、町原子力委員会委員の海外出張についてでございます。

資料第3号を御覧いただければと思います。

出張先はタイ王国、バンコク。出張期間は今週水曜日、明日19日から今度の日曜日、23日まででございます。渡航の目的は、タイ王国、バンコクで開催されるIAEA原子力発電セミナーにて講演を行うとともに、タイの原子力関係者と我が国の原子力政策などについて会談を行うということで、主要日程は、20日の日はIAEA原子力発電セミナーで講演、それからタイ放射線センターとの会談、21日の日がエネルギー省大臣、電力公社社長との会談、在タイ日本国大使への表敬訪問、22日土曜日が再びIAEA原子力発電セミナーラウンドテーブルに御出席されて御帰国されるとい

う日程になっております。

(近藤委員長)町委員、何か追加の御説明がおありですか。

(町委員)このタイ放射線センターとの会談と書いてありますが、多分センターの所長と会談をするんですが、特に食品照射のタイの状況、パブリック・アクセプタンスを聞いてみたいということです。あとは、このとおりです。

(木元委員)ついでに。私は、興味を持って調べてみたり、以前タイから持って来ていただいたりしたんですけども、ソーセージに照射済みとは書いてないんです。表示が無かったんです。

(町委員)そうですか。ラベルが付いていたと聞いています。

(木元委員)8年ぐらい前ですけども伺ったことがあったんです。今どうなっているのか、また照射食品の種類は拡大されていて、市民はどういう反応をしているのかということが分かれば、是非教えていただきたいと思います。

(前田委員)一つよろしいですか。

これはIAEAが主催で、放射線利用ではなくて原子力発電セミナーをされるというんですよね。タイは、余り具体的な計画もないと理解しているんですけども、IAEAがこういうセミナーをやるのは何を。

(町委員)やはりこれはタイからの要請で、今、前田さんおっしゃったように、今まで確かに具体的に原子力発電所をだれがつくるという計画は無いんですね。しかしながら、タクシン首相あたりは、今、天然ガス依存が67%で非常に高いので、天然ガスは遠からず無くなる恐れが十分あるのでエネルギーの多様化というのが必要だと言っているんですね。これまで原子力発電についてパブリック・アクセプタンスで失敗したこともあるので、IAEAに応援してもらって原子力発電を正しく理解してもらおうということの表れだと思います。

(木元委員)それこそ10年前には、原子力発電についてのパンフレットを作っていましたよね。発電所にも置いてありました。それがどうなったのか。

(近藤委員長)それでは、本件は承認ということでよろしゅうございますか。

それでは、そうさせていただきます。

その他、議題はいかがですか。

(黒木参事官)その他、特段ございませんが、次回の原子力委員会は、第29回の原子力委員会の臨時会議が7月20日木曜日に開催される予定でございまして、10時半から12時、場所はこの建物の地下1階、B105会議室でございます。

(近藤委員長)よろしく願いいたします。

その他、委員の先生方、何か。

よろしゅうございますか。

それでは、今日はこれで終わります。どうもありがとうございました。